二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ヴァイオレットレディ 淫堕の女戦士

VIOLET LADY

小説 茶　瓶
挿絵 三巷文

第一章　紫音と真紅　006
第二章　裏切り　034
第三章　虜囚　058
第四章　淫乱スパイ　090
第五章　信頼と失望　126
第六章　異形　163
第七章　堕ちる戦士　202

登場人物紹介

Characters

霧ヶ咲 凛（きりがさきりん）

正義感が強く平和を愛する、純粋で一本気な女性。「ヴァイオレットレディ」に変身して戦う。武器の扱いに長け、冷静な判断力を持つ。名実共にエース。

各務 涼子（かがみりょうこ）

凛と同期の女。ラピッドスーツ「真紅」を身にまとって戦う。気分屋で牝猫のような性格だが、戦闘力は高い。

相田 恭平（あいだきょうへい）

凛と涼子のサポートをする、真面目で純粋な好青年。

ゴルディ

犯罪組織「レイブン」の幹部。残忍な性格と怪力の持ち主。

『第六章　異形』より

「あは……ッ……んふぅ……ッッ……あぅ…っ」
ハートに直撃する愉悦に声を我慢できなくなってきている。スーツの裏側を押し上げている肉真珠を、わざと避けるようにぎゅぎゅッと断続的に締め上げたかと思えば、触手の先端から伸びた細い舌が、ますます浮き上がった肉突起をきゅっと締め付ける。肉ヘビから分泌される媚薬が乳首の奥にまで染み込み、思わず泣きたくなるような快楽が胸の奥で爆発する。艶かしく吐息を漏らしながら、ゾクゾクするような快感に浸ってしまう女戦士。
「へへ……エロい顔しやがって……もう我慢できねぇんじゃねーのか？」
囃し立てる巨漢の声に、自分が快楽という甘美な魔物に支配されている事に気づき、ぼんやりしていた頭を振って、脳裏からピンク色の靄を追い出そうとする。
しゅるるり……。
快楽と戦う紫の戦士をあざ笑うかのように、一本の触手が粘液を迸らせながら頬を撫でる。なめくじのように粘液跡を残しながら、触手が顔を撫で回していく。鼻先に来る気を失ってしまいそうなほどの臭気。女戦士が吐く吐息、触手が発する臭いと粘液から出てくる媚毒、それぞれが混じり合って、ガラスの牢獄の中を扇情的な桃色の空気で満たしていく。
「いやぁ……ッッ」
目の前で見るとその肉触手の形は恐ろしく凶悪な形をしていた。黄色がかった粘液を全身にまとわりつかせ、人間の腕ほどもある胴体の表面はブツブツとした突起がいくつも浮

かんでいた。赤黒い先端がキノコ類のように大きく傘を張り、男性器の形を彷彿とさせる。
きゅんッ……。
「んんぅ…ッ」
男のペニスを意識した瞬間、凛の子宮が敏感に反応する。かつて肉棒に与えられた絶頂快楽を反芻するように、何度かお腹の裏側が脈打ち、熱く重い快楽を体内に染み込ませていく。凛は切ない表情を見せつけながら、太ももを一層強く引き締め、背中を震わせてしまうのだった。
ぬりゅりゅりゅりゅ……っ。
分泌した愛液に反応したのか、今まで媚尻や太ももを執拗に這い回っていた触手たちが一斉に股間を狙って動き出してきた。
（あぁ……ヤ…ッ……やだ……ッ……そこは……ッ！）
咄嗟に股間を庇おうとさらに強く足を引き締め、両手で秘部を隠そうとするが、幾重にも絡み合う触手が、女戦士の両腕を拘束し、マッサージをするようにグネグネととぐろを巻いてくる。両肩から力が抜け、握り締めた拳が解かれる。
閉じた秘部を開かせようと、執拗に尻と太ももへの愛撫が繰り返される。快感を得てムッチリと張った桃尻、その紫のスーツに包まれた熟果実にクリームを塗りたくるように媚薬粘膜まみれの触手を何本も這わせていく。尾てい骨の輪郭に沿ってじっくりと撫でるかと思えば、大きな両尻に巻きついてきゅっきゅっと何度も締め付ける。

「んあぁ……んむぅぅぅ……ッッ」
ゾクゾクする快楽に悶え美尻を背面のガラスに押しつけながら、何度も背筋を反らす。
「んむむぅぅぅッッ」
快楽で脱力した瞬間を狙い、スーツの股布へと触手の先端が進入する。慌てて股を閉じるものの、既に数本の触手が秘部へと辿り着いてしまっていた。太ももを締め付ける行動は、触手を一層深く粘膜へと近づける結果になる。8の字を描いてスーツの股間部のさかい目をれろぉっと舐め上げるように這ってくる。
（いやぁぁ……そこだけは……やめてぇ……ッ）
心の叫びもむなしく、キュッと締め付けられた狭い陰部にムリヤリ潜りこんでくる肉触手。ぬめり気たっぷりの肉ツタが股間の奥へ奥へ侵入しようとこころみてくる。
「ウフフ、これはもう駄目ね。正義のヴァイオレットレディもこのまま触手に犯されて、淫乱に堕とされておしまいだわ。ねぇ恭平もそう思うでしょ？」
恋人の悲しそうな視線を感じた。
（せめ…て…ッ…ンン……声だけでも……おおッッッ）
自分が散々に感じさせられてしまっている事を、恭平にも知られてしまっているに違いない。凛の身体は実際に触手によって深い快楽の底へと落とされかかっている。しかし、それでもほんの少しでも、抵抗したい。愛する人のためにも、何か一つでも一つでもいいから操を立てたい。そんな思いから、口にグッと力を込め、喉奥の唾を呑み込んで、声が

少しでも漏れないようにする。
「へっ……好きな男の前では感じる声は出したくねぇってか。まぁすぐにそんな考えもすっ飛ぶほど感じちまうだろうがな……」
傍観を決め込んでいる男たちを尻目に触手群の動きがさらに活発になってくる。ミミズのような細い触手が粘液を伴って股間部――自身の愛液に濡れそぼったスーツのハイレグ部分――をなぞり上げた。
「う、んんん……」
くすぐったさの中にも、ぴりぴりと痺れるような感覚。背筋にゾクゾクと寒気が走る。くぐもる声が湿ってくる。同時にスーツの双乳を這っていた触手がますます強く、乳房を搾り上げる。胸の外側を縁取るようにゆっくりと舐め上げるかと思えば、脇腹をくすぐるように先端をぐりぐり押しつける。胸を手で掬い上げるように釣り、震える先端の突起をツンツンと突く。
（……ん…ッ…胸が……ッジ…はじけそう……ダメ…ッ…声が抑えられない……ッ）
肉悦の叫びを外に出したくてたまらない。形のいい唇をキュッとすぼめ、漏れそうになる声を必死に抑えつける。
「ンンンッッッ!!!」
突然頭が反り返るほどの衝撃が胸に走る。にゅるにゅるとぬめった感覚が、素肌に直接感じた。今まで執拗にスーツの上から乳房をいじめていた触手が、脇腹の隙間を抜けて布

地の内側に侵入。粘液を塗りつけながら直接乳房を攻略しにかかってきたのだ。
「いや……ッ……中にッッ！」
スーツにエネルギーが蓄えられていれば、特殊な磁力によってスーツと肌の隙間はぴったりと閉じられ、侵入される事は決してない。普段では感じた事のないスーツの中から与えられる快感に背中をゾクゾクとさせられてしまう。スーツを押し上げる乳肉は、少女の肌のように敏感で、ぬるぬるとした触手が這うだけで、股間にビンビンと伝わるほどの刺激を受けてしまう。さらに地肌を媚薬まみれにされて、乳肌の感度は極限まで高められていく。触手がスーツと肌の間の狭い空間を暴れまわり、大量の肉ツタがスーツの内側から押し上げる様はゴルディたちの目を喜ばせた。
「ひぅッッ……ッ……んひゃ……ぅッッッ！」
乳房の肉をむにゅっと押されるだけで、頭に直接響くような激感が起こる。スーツの上からでもあれだけ感じさせられたのだ。それを直接、淫薬を塗りつけられて愛撫される魔悦は、想像を絶していた。胸を螺旋状に絞られると、子宮が踊るようにキュンキュンと跳ねた。乳首に触手が掠るだけで背中が仰け反る。立っているのも辛い。
ぐにゅぐにゅ……くちゅくちゅ……ッッ。
乳への淫撃に力の抜けた下半身を好き勝手に触手が這い回る。ハイレグ越しに何度も秘裂に淫撃を与えられ、股間から力が抜ける。布地の裏から染み出してきた粘液をくつろげられ、いやらしい水音が下半身から立つ。さらに布地越しに陰唇の形をなぞるように何度

も先端で舐め上げる。それと同時に乳房の触手が肉果実をギュッと締め付け、露わとなった突起部をグにゅっと踏み潰す。
「ぁぅッッッッッ！！！！！！！」
かなきり声を上げかけ、喉の奥でグッと耐える。「あ」と「う」の中間の口の形のまま奥歯を噛み締めた。ただひたすら噛み締め続けた。
（んんッ……んんッ……んん……ッッッ）
ビクビクビクビクッッ……!!
身体を震わせ、軽いエクスタシーの波にさらわれる女戦士。スーツの中身を確かめるように執拗に乳房がこね回される。遠慮なく先端部が何度もグニグニと曲げられ、二本の触手で挟み込むように舐め削がれる。
「んぅぅぅぅッッッ!!!」
ビクッと顎をはね上げ、喉の奥でなまめかしい唸り声を上げる。微妙な粘り気を持った肉に乳房を包まれ、くびられると、生暖かい快美感が身体を覆っていく。螺旋状に巻きつく赤黒い触手が、餅をこねるように、乳首から母乳を搾り出すようにむりゅっと先端へ肉を送り出されると、ビリビリと電流が背中を走っていく。メロンのように形のよい乳房がぐねぐねとこねられ、形を歪められ、一層固くなった乳頭をしつこく何度も押し潰してくる。その度、身体を走る悩ましい熱が、身体を溶かそうとしてくる。
（アんッ――……私は感じていない……かんじてない……ぃッッ）

紅顔を伏せ、身体の反応を否定する事で、何とか肉体の熱を逃がそうとする。
にゅるるるるるるっっ。
「ぁ――――ッッ」
逃げる女戦士にトドメを刺さんとばかりに、股間の触手が濡れそぼって用途を成さなくなった布を横に避け、直接女の秘部へ侵入を開始した。
（……ッッッッ……ダメ……ッ……そこぉおおおッッ!!）
一本、二本と次々股布の中に触手が入り込み、ぐちゃぐちゃと肉粘膜をこね回した。
「……んん……ぁぁあッ……」
声が勝手に漏れる。二本の触手によってビラビラを広げられ、細い触手が襞肉を滅茶苦茶に掻き回す。それだけで腰が抜けそうなほどの快感が腰椎を蕩かす。さらに別の触手の先端が、膣の浅瀬の部分に頭を出し、ぐねぐねと回転させるように膣壁を刺激する。絶えず媚毒粘液を柔粘膜に塗りつけ、女の性感を狂わす事も忘れない。
「へっへ…あんなにいやらしく腰を振りやがって……」
ゴルディの言う通り、触手に取り付かれた女戦士の腰が、肉触手に応じるようにクネクネと色っぽく動いていたのだ。
（こんなのって……こんな気味の悪い怪物に犯されてるのに……ッッ）
汚らわしく、この上なくおぞましい怪物。その肉触手に体内を這い回られる刺激は、気が遠くなりそうなほど気味悪い事だった。しかし、それを不快として感じるよりも先に…

心を反応させられてしまう。胸の奥から甘い熱が染み出し、全身を覆うおぞましさが妖しい胸の高鳴りに変えられてしまうのだ。

「んはぁ……ん……はぁ……」

男の欲情を誘う快楽のダンスに、ゴルディばかりか、恭平までもがゴクリと涎を呑み込んでその光景を見つめていた。

ぬりゅりゅりゅりゅ……ッッ。

「……あーーーッ入ってこないで……ッッ」

思わず口をついて出た拒絶の言葉が届くはずもなく、触手が陰唇を割って凛の胎内へと入り込んでくる。人間のものではないという嫌悪感と異物感。しかも、その淫蔦は、先ほどあった人間の女を犯すためにあるような、凶悪なペニスの形をした肉棒触手であったのだ。そのあまりのグロテスクさに、脚を必死に閉じて拒もうとするが、媚薬粘液をまとった触手はいとも簡単に膣粘膜を掘り進んでいく。

ズブッ……ずぶぶぶぶッッ。

魔薬をまとった肉は粘膜を通過するだけで、強制的な愉悦を女戦士に与えてくる。デコボコの触手ペニスは身体の隅々に、胴体を擦りつけながら、ゆっくりと確実に、膣奥を目指していく。強烈に疼かされた膣粘膜は、バケモノの刺激をも素直に受け取り、凶暴なほどにエラを張った先端が、膣肉を掻き分けていく感覚は、何ともおぞましく、甘美なものだった。身体の奥にまで届く肉悦の衝撃に、たまらず愛液をこぼし、そしてますます膣内

の潤滑を高めていくのだった。
ズンッ。
そして先端が膣奥に衝突した瞬間、頭の奥から音がしたような深い深い、快楽が腰奥を震わせた。
「あおおぉーーーーッッッ」
吼えるような声を上げてしまう紫戦士。子宮に亀頭の直撃を受け、避けられない快感が、腰椎を蕩かす。快楽に蕩けた膣壁をねっとりと擦りたてられ、熱い先端で何度も何度も子宮を突き上げられる。
（あぁこんなの……身体が溶かされちゃう……ッ）
膝から力が抜け、その場にうずくまってしまう。ガラスの床に手を突き、まるで外の人に触手の性交を見せつけるように美尻が高く上がっていく。ズンズンと深く突かれる度に股が開き、触手を受け入れるように桃尻を振ってしまうのだ。
（ダメ…ッ…恭平が見てる……だめ……なのに……ぃッ）
恋人の目の前で化け物の触手にレイプされる、そんなおぞましい背徳感が凛のマゾ的な女悦を刺激し、一層身体をカァッと燃え立たせてしまう。長い黒髪をブンブンと横に振りながら恋人の視線を嫌がる女戦士。髪についた光る汗がケースの中に微かに飛び散る。
にゅるるる……っ。
「あ……いや……ッ……そっちは……ッ」

股部の中に侵入した触手のうちの何本かが、尻肉を伝って女戦士の不浄の穴、肛門へと辿り着いていた。
「いやぁぁぁぁッッ!!　やめてッッ！」
排泄にしか使った事のない恥ずかしい部分への刺激に、本能的な嫌悪感を感じ、必死に抵抗する。
「んむむむぅぅぅ……ッッ」
女の叫びを塞ぐように、顔を這っていた一際野太い触手が口内にムリヤリ入り込んでくる。あまりの太さにむせ、呼吸困難に陥るが、肉ツタの動きが徐々に慣らすようなゆっくりとした感じになってくると次第に頭がぼうっとしてくる。
「はむっ……あん……ん……ちゅちゅ……ぅッッ」
口の中に直接注ぎ込まれる媚毒が、脳に滲むように凛を快楽で溶かしていく。口内の触手はとても苦く臭く、気持ちが悪くてしょうがないものであった。しかし、
（どうして……こんなものが……たくましくて……美味しい……なんて…ッ）
「はぁ……んちゅ……んんじゅる……んん…ふ…ぅ…ッ」
一心不乱に舌を使い、熱くて固い肉触手を舐めしゃぶる。口の中で固さを増してくるこの肉が愛しくて仕方がない。
「ウフフ……高潔な女戦士様は、どうやら恋人なんかより、バケモノのチ〇ポがお好きみたいね……。」

『第七章　堕ちる戦士』より　その１

こいつは憎き敵なのだ。人間の敵、女の敵、今も私と恭平を苦しめている敵……。

「へへ……俺が欲しいんだろ……」

ドクン……ッ。

再び心臓が高鳴る。股間に固いものが当たっている。見なくてもわかる、この男の肉棒だ。先端部がちょうど凛の秘部の中心に当たっていた。強く抱きしめられながら、女の部分でゴルディの「男」を感じる…。

「お前が欲しいって言うならたっぷりと感じさせてやるぜ。この俺のモノを、よ」

身体よりも先に心が屈しそうになっていた。男の逞しい身体に脳がくらくらとする。ゴルディの匂い立つ体臭が、どうしようもなく凛の心を締め付けるのだ。

恭平の方を見ると、女たちが股間に群がって、無数の舌でペニスを愛撫していた。

「ふふふ……こんなに固くしちゃって……恭平君ってとってもスケベなのね……」

「先っぽからヌルヌルしたものが出てきてるわよ……彼女に見られて感じちゃったぁ？」

ゴルディのモノと比べたら貧相ではあるが、それでも十分に勃起した男の象徴。その肉竿を執拗に這い回る赤い唇。固く勃起した先端から胴部までベタベタといやらしい形のキスマークがつけられていく。

「うぅ……ッ」

妖女たちによる執拗な愛撫に、次第抵抗する力を奪われていく。凛が悲しそうな瞳で見つめても、陵辱女たちの舌は止まらず、ますますその舌技に気が入っていく。

「アハハっ。情けない顔……お姉さまたちに弄ばれて感じちゃってるわけ？　恋人が見てるっていうのにとんだ正義の味方だわ」

涼子が身体を震わせて大声で笑う。しかし凛も心穏やかではなかった。顔中、身体中を唾液と汗まみれにし、陰唇のような口紅跡をつけ、情けない顔で感じる男の顔、名前すら覚えてない女たちに反応してしまう自分の恋人に幻滅にも似た気持ちを覚えてしまう。今までの自分の痴態も忘れて恋人の情けなさに心底がっかりしてしまうのだ。

（あ……ッ）

そんな気持ちにも押されたのか、パっクリと陰唇が開く自然な感覚を下半身で感じた。心も身体もこの男を欲しているのが自分でもわかった。

「へへ……っ……身体が反応し始めたみてぇだな……」

じわ……っ。

男の匂いを感じ、女の奥の部分から淫蜜が滲み出てくる。愛液が弾ける感触を感じたのか、股間を真正面から捉えている巨漢の肉先端が、ピクピクと震え、さらに大きさを増す。男と女の発情した匂いが混じり合い、この上なく淫靡な光景を作り上げていた。

（あぁ…もう……私どうなってもいい……）

キツく抱きしめられ、固い胸板で豊かな胸が押し潰される。乳首が巨漢の胸の中でグネグネと捻られ、こね回された。熱い吐息を男の身体に吐きかけ、胸奥の痺れに浸る。

さらにスーツの盛り上がった股間部でピンっと尖ったクリトリスを目ざとく見つけ、太

い指で転がしてくる。
「はぅ……ッ…ッ」
それだけでも何度も背筋が強張る。さらに男は繊細な動きで先端をくすぐったかと思うと、キュッと豆を摘むように指先で淫核を狂わせ、そのままボリュームを操作するようにぐりぐりと左右にねじりこね回す。その間にも、逞しい肉棒がズン…ズンと股間の秘裂を突き上げている。
（もうだめ……ッッ……私ッ……ゴルディに抱かれたい……ッッ）
ズボンとパンツ越しに亀頭と淫唇を触れ合わせているだけで、身体を突き抜けるような衝撃を受けるのだ。これがもし直接だったら。
ゾクゾクゾクゾクッッ！
身体に寒気がするほどの快楽の予感。絶頂寸前にまで高ぶった身体が、目の前の男を求めて疼き出す。この憎き、卑劣な悪漢に、身も心も屈したい。自分がわからなくなるほどに激しく犯されたい。
（でも、いいの？　……本当に、正義の戦士である私がこんな所で……恭平の前で屈してしまうなんて……）
最後の最後に残った心の奥底、戦士としての心が、ほんの微かに疑問を投げかける。
ぐりッ！
「あ――――――――――――――――ッッ」

だが、逞しい亀頭が秘裂に直接押しつけられた。それだけで、子宮が恋をしたようにキュンキュンと跳ねまわる。腰奥がペニスの威力に屈し、戦士の意思がいとも簡単に砕ける。

「――――私をッッお、おかしてッッ！　ズブズブって気を失うくらい強くぅぅぅっ！」

恭平の目の前なのに。愛する人の前なのに。自分からこの男を求める言葉を。愛する恭平もまた、この世のものとは思えないものを見たという目で自分を見つめている。その視線がとても痛くて、気持ちいい…。

「あー？　聞こえなかったな。もっとハッキリわかりやすい言葉で言ってくれよ」

ニヤニヤといやらしい笑顔で、男が言う。本来なら今すぐ喉を掻っ切ってやりたいほど憎たらしい顔なのに、強く抱きしめられ、秘裂にペニスを押しつけられると、身体がぐにゃりとなって屈してしまう。

「私の身体を抱いてくださいッ！　わ、私のオマ〇コをチンポでたっぷりと躾けてッ、身も心もあなたの女にしてぇッッ!!」

「アハハハハハ！　とうとう言ったわ、凛。あんた恭平の前でよくそんな恥知らずな言葉が言えるもんね、ほんと最悪の淫乱女だわ」

涼子の嘲り、恭平の信じられないという顔、あらゆる羞恥と屈辱が被虐的な快楽となって凛の身体を蝕む。心臓がドキドキして熱い気持ちが止まらない。どんなに口で否定しようとも自分の心は正直だった。

「オラ、俺の女になりてぇんだったら、コイツに挨拶しな！」

ぴらっとズボンの前を開けると、先端に粘液を滲ませた凶悪なペニスが顔を出す。レイブンの戦闘員や恭平のとは比べものにならないほど、逞しく、鋼鉄のように固い男性器、ペニス、チ○ポ……。

（あぁぁ……ッッ……コレ……ッッ……これが……私の事…泣きたくなるほど…ッッ…感じさせてくれるモノ……ッッ!!）

その先っぽから漂ってくる性臭を嗅いだだけで、全身が官能に包まれる。そのたまらない匂いを鼻腔一杯に吸い込むと、歯医者の治療の時、見せるように限界まで口を大きく開ける。ゴクリっと喉が鳴り、口の中に唾液が湧いてくる。顔は紅潮し、目元が潤んで、息も次第に荒くなる。

「はぁぁぁあぁぁぁむむッッ!!!!」

だらしなく涎を垂らしながら、幸せ一杯の顔で肉亀頭をほお張る。口一杯に押し上げてくる「男」の感触。その圧倒的な充実感。亀頭をしゃぶるだけで達してしまいそうだ。

「んぐんむ…むんちゅる…はあむ…んああむ…あん……んちゅ…ちゅぱぁ…ああむ……」

（ほぉぉぁぁあ、熱ひいぃぃぃぃぃぃッッ！　チ○ポに溶かされるぅぅぅぅッッ!!!）

口の中が焼けそうになるくらいに勃起が熱を持っている。口腔を亀頭が通過する度に身体が溶けそうになる。

「んんちゅ……あぁ美味しいッッ！　オチ○ポ…美味しいですッ！　…はむぅ……ッッ」

もはや自分の感じている感覚を隠そうともせずに、露骨な淫語を吐きながら、フェラチ

オに没頭する。
　ズポッ！
「あ――ッッ」
　強く吸引していたせいか、酷く下品な音を立てて、口内から肉棒が抜かれた。肉亀頭の感触を惜しむように舌が長く突き出され、淫液と唾液が糸を引いた。口の中を支配していた存在の喪失に、寂寥感と切なさで一杯になる。
「あぁ――チ○ポ離さないでッ。もっとたくさんちゅぱちゅぱしたいのに……。オチ○ポいっぱい欲しいのぉ!!」
「グヘヘヘ、いいぜぇ……そろそろ入れてやるっ」
　しかしすぐに膣内に挿入してくれると知ると、犬のように従順な表情で腰を迎える。ゴルディは尻を両腕で抱え、凛は男の首に両手を回す、駅弁のスタイルで結合を迎えようとしていた。
「り…凛……ッ……うッッ」
　恋人が間男に寝取られようとするのを何とかして止めようとするが、恭平もまた妖女の淫花に肉棒を捉えられ、無理矢理に挿入させられてしまった。じたばたと暴れようとする青年の身体を押さえつけ、唇をその身体に押しつける。わめく唇を強引に奪い、舌をムリヤリ絡ませる。
「ほらほら、暴れないの……すぐに私たちの身体の虜にしてあげるから♥」

長いディープキスと、妖しい誘惑の囁き。恭平の唇にクッキリと口紅の跡を残し、女が離れていくと、もはや青年の目に抵抗の意思は消えていた。ふぅっと色っぽく吐息を耳の中に注ぎこむと、ブルっと身体を震わせる恭平。そんな青年の姿を横目で見ながら、ゴルディの肉棒を受け入れていく。

ズブブブブッ。

「はぁぁぁぁぁンんんんッッ」

ゆっくりと膣内を掻き分けていく固い肉の感触に、うっとりとした声を上げる。

（あぁぁぁ……入ってきたぁぁぁぁッ♥）

待ちに待ったペニスのその存在感。膣内一杯にペニスが埋め込まれているというだけで、軽いエクスタシーを感じてしまう。ゴルディの肉の塊がさらに奥に挿入され、ズブズブと音を立てながら中に収まっていく。

「あぁッ大きいィッッッ。スゴいいいいいっ、アソコがパンパンになってるッ」

今まで経験した中でも一番立派なペニス。膣壁が裂けそうなくらい太くて、膣奥にまで先端がきているのに、まだ半分ほど残っているほど長い。なんといってもその充足感がたまらない。蕩けた表情で挿入感に浸ってしまう。

ズンッ。

「おはおおおおおおおおおおうぅウウウッッッ!!!」

子宮に亀頭が埋め込まれる感覚。ズゥーンっと重くて深い快感。甘ったるい感覚が腰奥

から染み出てくる。しかも駅弁の体勢なので、体重がそのまま挿入部にかかってしまい、子宮にさらに深く深く男性器がはまってしまう。

「おおぉぉぉオオオ――オマ〇コにチンポ――刺さってるうぅぅぅぉぉぉ!!!　子宮までいっぱいいいいいッッ、オオんんんんんんんんんんんんッッッッ」

髪をぶるっと震わし、瞬時に絶頂寸前にまで持っていかれる。子宮から生まれた甘くて切ない絶頂感がお腹の奥で渦巻いて、何度も何度も凛の心を締め付ける。凛は両足をゴルディの腰にギュッと巻きつけ、顔を真っ赤に染めて、自分から抱きしめるようなポーズで何度も感じる女の顔を男に晒す。

「っっく……ぅウッッ……はぁ……はあ……ッ」

全身が熱っぽく、息が苦しいくらいに胸が高鳴る。巨大なペニスは膣粘膜にぴっちりとはめ込まれてしまっていて、少し動くだけではっきりとその位置がわかってしまう。自分の感じる所、刺激を求めている所を探り出され、心憎いほどの強さと執拗さで擦り、突き上げてくるのだった。

ズブッ！　ずぼぉ！　ヌチュッッ

繰り返される抽送に下品な破裂音と粘液が掻き回される音が混じり合い、部屋の天井にまで響く。その音の恥ずかしさに膣をキュンっと締め付けると、形がわかるほどに固く張り詰めた肉亀頭がそれに応えるように隅々まで、膣粘膜を丹念にこすり上げる。

「ぴちゃ…んむむぅ……れろれろ……ッッ」

男は断続的なピストン運動に腰の動きを変えながら、唇を奪ってくる。舌を絡めとられ、うっとりとした気分になりながらの深い挿入は、恐ろしいまでに気持ちよく、おぞましいはずなのに、幸せを感じてしまうのだ。

「どうだ？　子宮を抉られながらのディープキスはたまらねぇだろ？」

女の身体全体を持ち上げたり下げたり、体重が亀頭にかからないように腰の位置を調節しながら腰を大きくグラインドさせる。時折先端を奥へ密着させて8の字を描くように腰をくねくねとこね回す。

ズズズズズ……っ…ずちゅ……ずぶぶぶ……。

「うぅぅぅんん！　ああッそこぉ。たまんないッ。そこをもっと、ズンズンしてぇ！」

腰の動きに合わせて快感ポイントが移動する。断続的に抜かれたり急に刺し貫かれたりと、大男の操るがままに快楽を操作される。少し放っておかれた子宮がきゅんきゅんと疼き始めた瞬間に、膣奥に弾力のある亀頭を密着させられお腹の裏がそっくり返るほどのゾクゾク感がダイレクトに伝わり、子宮に描かれる腰文字を否が応でも受け止めてしまう。

「そこ、じゃわからねぇなぁ……もっとはっきり言ってくれねぇと。一体どこを突いたらいいのかわからねぇぜ……へへ」

空とぼけた顔をしながら肉棒が焦らすように浅い部分をゆっくり掻き回し始める。身体を包んでいた愉悦が突然薄れ、泣きたくなるほどの切なさが女肉を襲う。

「……お……奥よ……もっとオマ〇コの奥……ぅッ……オマ〇コの奥ッ!!　……子宮に当

たるくらい……いっぱい突いてぇぇぇぇ!!!」
恥も外聞もなく、男のペニスをおねだりする凛。熱に浮かされた彼女の頭の中はもはやペニスで子宮を一杯にして欲しいという以外に考えは働いていなかった。
「へへ……オマ〇コの奥だな……ほらよ……ッッ!!!」
ずぶぶッッぬりゅりゅりゅッッ……。
「あんはぁぁぁぁぁぁ！　奥ぅぅッ！　チ〇ポキたッ！　おおぁぁぁぁぁッッ　オマ〇コいいのぉ！　固くてぶっといオチ〇チンでメチャクチャにしてぇーーーッ！」
抜かれる時は切ない瞬間。逆に深く突かれる時は幸せの瞬間だった。そうやって何度も何度も切なさと幸福感を味わいながら、恋人になったような気分で巨漢の胸に顔を預け、甘い吐息と可愛い喘ぎ声を漏らす。
「へへへ……そろそろ出すぜ……さっきの薬が効いてるからな。妊娠確率は一〇〇パーセントだ。絶対に妊娠させてやるぜ、凛……」
熱く語る男の腰がさらに元気動き出す。膣奥を突き上げてもまだ足りない肉棒が下がりきった子宮をこれでもかと抉りぬく。腰を抱えながら、乳房に手を伸ばし、ぐりぐりと充血した乳肉をこねる。胸奥から痺れるような電流が走り、さらにその先端をベロベロと舐められると、たまらない感覚が腰奥で弾けてしまう。
「あーーーーッ！　いやッ！　そんなぁッッ」
深い挿入に腰を迎えながら、形ばかりの抵抗の言葉を発する女戦士。もはや身体は完全

にゴルディに屈服し、この男の操るままに、腰を迎え、唇を差し出し、両胸を押しつけてくる。尻を色っぽく突き出し、ペニスを受け入れながらブンブンと振る。

「へへ……そうか。でもよ中出しは気持ちいいぜ……それも今回は妊娠中出しだ。今まで感じた中でも一番。絶対に我慢できないアクメを味わえるんだぜ」

「一番……絶対に我慢できないアクメ……ッッ♥♥」

男の言葉を反芻する。ゴクリと喉が一つ鳴った。今まで味わった事のない快楽への期待に子宮がキュンっと疼き、さらに亀頭を深く埋め込もうと自分から降りてくる。

（あぁ……ッ……くる…ッ…スゴイのがくる…ッ）

避けられぬ絶頂の予感に、全身を期待で震わせる。

「オラ、俺を愛してると言ってみな。言う通りにしたら、たっぷり中出ししてやるぜ」

子宮をズンズンと小突かれ、何度も亀頭の弾力ある先端でキスをされる。身体の震えと切ない疼きが限界まで高まっていく。この絶頂予感にさらに妊娠というスパイスが加わるとどうなってしまうのか。おぞましいほどの恐怖。決して許されざる性の暴力。この上なく屈辱的な陵辱。しかし……。

（妊娠させられたら…私……ッッ…どうなっちゃうの……ッッ……）

ゴルディによって、熱い精液を胎内に注がれ、それによって子供を孕まされる。そんな破滅的な想像が、凛の被虐快楽を加速し、精神を狂わす。乱れた衣服からこぼれた乳肉をぶるんぶるんと震わせ、キラキラとした情熱的な瞳で大男を見つめる。

「好き…ッ…ゴルディ……愛してるわッ！　大好きぃぃぃぃッッ」
熱で浮かされた表情は女悦に歪み、憎き敵への愛の言葉という屈辱も、凄まじい背徳感を煽るものでしかない。妊娠絶頂を切望する女戦士の姿にはもはや凛々しい面影のかけらもなかった。
「あぁぁあんッ！　早く中で出して、熱いザーメン一杯出してぇぇ!!　濃厚な子種たくさん膣内出しして私を妊娠させてぇぇぇぇぇーーッッ!!!!」
「そんな……凛……」
恋人の聞くに堪えない淫語と艶姿に、妖女の口紅を口元にべっとりとつけながら、情けない声を上げる青年。しかしその姿もすぐに、女たちの肉体に溺れさせられる。そんな男に対し優越感を抱くように、ズンズンと自信たっぷりのつき込みを加えるゴルディ。そしてその動きに応えるように腰をぐりぐりと回しながら、ペニスを迎える女戦士。
「へへ、いいぜ。たっぷり中で味わいなッッ！」
ズッチュ…ずぼずぼずぼ……ズンズンズンッッ。
浅瀬の悦楽スポットを抉る動き、ゆっくりと膣内全体を擦る動き、膣奥まで執拗にねっとりと貫く動き、激しく子宮に先端をはめ込む動き。様々な快楽が怒涛のように凛の身体の奥を掻き回し、翻弄する。極限まで高められた心と身体が、心からの男への屈服を願って、熱く疼く。目の前の男を見つめる瞳が熱く潤み、うっとりと甘く蕩けた表情はまさに恋人同士が睦み合っている姿そのものであった。

「出してッ!!　凛のスケベマ◯コに、ゴルディィの臭くてドロドロのザーメン中出ししてぇぇぇっぇぇぇぇぇ、私を妊娠させて――ッッ!!!!」
「おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉイクぜぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
猛然と腰を使う男にぴったりと腰と胸を押しつけて、腰を迎える。子宮が弾力のある肉に連打され、躍る。子宮と亀頭のディープキス。もはやどうにも堪えきれない絶頂快楽が、お腹の裏側、すぐそこにまで来ている。そして絶頂へと飛び立とうとしたその瞬間、
ドビュぶぶぶぶぶぶっるルルルリュリュリュルルルルルッッッッッ!!!
物凄い勢いで、肉棒の先端からザーメンが噴出する。
「あぉあおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉおお……ッッッ」
子宮に密着した亀頭から、直接浴びせかけられる熱い子種。子宮の中を力強く泳ぎまわる精子の濃厚さ。動物のような吼え声を上げながら、身体を極限まで反らしてアクメに達する。身体が飛ばされてしまう。しっかりと「恋人」の身体にしがみついていないと、身体がそのままどこかへ飛ばされてしまいそうだった。
「いくっイクッいくいくッッ…イクイクイクイクいく――ッ!!!」
狂ったように「イク」と繰り返しながら、子宮絶頂の恐ろしいまでの愉悦に震える。
「あぁーーー…………………………………………………ッッッ」
もはや言葉も出ない。泣きたくなるほど切なく甘い絶頂。心の底から味わう妊娠絶頂に、何度も顎を反らし、法悦の涅槃へと旅立つ。

『第七章　堕ちる戦士』より　その２

「天下のヴァイオレットレディも男のチ○ポの魅力には勝てねぇってわけか。がっはっはっはッッ」

下品に笑う巨漢の言葉に羞恥を覚えながらも、口の中の固い棒をしゃぶる事はやめられない。

「あぁ私ッダメなのぉッ、この固いオチ○ポに逆らえないのッ!!　このチ○ポの奴隷なのぉ…んむむほぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」

身体が官能に屈していくのがはっきりとわかった。妊娠させられた自分が大男の前で腰を振って、淫女のように快楽を求める姿が脳裏に浮かび、身体をビクビクと震わせる。そんなマゾ的な感覚でさえ、快楽に変えられ、男のペニスへと自ら腰をぶつけていく。パンパンという音がやけに耳に煩く響いた。

「ほらほら、彼女、まだ余裕があるみたいよ。もっとたくさん喜ばせてあげないと。幹部の女を満足させれば、何かご褒美があるかもしれないわよ……」

無数の黒ずくめの男たちに「教育」するように指示を出す涼子。セックスが始まり、性臭をますます濃く漂わせた部屋の中、あぶれた男たちは人間のものとは思えないほどに不気味に黒ずんだペニス、それを隠そうともせずに天井に向けそそり立たせる。

「……はぁ……はぁ……ッ」

衣装の奥から覗かれる目は異常に血走り、目の前の肉体を貪ろうと狙っていた。

「ほれ、まだ穴はもう一つ開いているぜ、早いもの勝ちだっ」

そんな部下たちの様子を汲み取ったか、女への陵辱をさらに苛烈にせんとするゴルディ。その声に黒ずくめたちは押し合うように身体へと殺到する。

「おおおっつ！」

いち早く美尻の前をキープした男が、少しの間もおかずすぐさま菊穴へと挿入してくる。

ズボボボボォッッ!!

「うううううおおんんんッ」

壁を突き破るかのような音が、胎内で響き、恐ろしい圧迫感が女を襲う。膣内に埋まった肉棒が、グッと押され、ますます強く膣壁へと押しつけられる。

しかし痛みはなかった。それが余計に恐ろしかった。何も準備をしていないはずの尻粘膜は長大なペニスを楽々受け入れ、そしてスムーズなピストン運動も許してしまっていた。時折、子宮深くに埋まった亀頭と壁越しに直腸まで刺さった亀頭がこすれあうと、身体の芯から蕩けそうなほど、甘く深い快楽が腰奥で爆発し、なんとも言えないような切ない表情を浮かべてしまう。

「おおぅぅぅぅぅむむぅぅぅぅぅ……ッッッ!!!」

身体の奥から襲い掛かる愉悦。子宮に亀頭がキスをする度に、腰が飛んでしまいそうになる。口内のペニスにむしゃぶりついて、どうにかそれを回避しても、すぐさま直腸粘膜をゴリゴリと削る肉亀頭が、凛の意識を飛ばそうとしてくる。

「んんんん……ッッ！　……んああむ……あん……んちゅ……ちゅぱぁ……ああむ……」

（あぁ――くる……ッすごいのがぁ、き、きちゃう……ッッ!!）
自分が消えてなくなってしまいそうなほどの、大きな絶頂の波の予感に恐怖する凛。黒髪を振り乱し、涎を飛ばすほど激しく奉仕に没頭しながら、身体の疼きを何とかごまかそうとするが、腹の底に溜まったドロドロとした疼熱が胸を締め付けるほどに切なく、甘く彼女の身体を蕩かしていく。女としての力が奪われていく。
「うぅ……っ」
フェラチオ奉仕を受けていた黒い男の息遣いがせわしいものとなり、時折鋭い呻き声が聞こえる。肉竿の硬度が増し、肉の臭いが一層濃く辺りに漂い始める。男たちの気配がある一つの地点を目指していると意識すると、カーッと身体が熱くなる。
（射精……ッッ……するの……ッ!?）
熱くて固い男性器から発射される白くて濃くて、たまらなく臭くて……そしてとてつもなく熱い液体を思うと、身体が絶頂を思い出して恥ずかしい身震いをしてしまう。ブルッと身体を震わせ、背中のゾクゾク感が止まらない。
「んん……ッ…はぁう……ッッ……ッッッ」
キュン…ッ。
子宮が切ない音を立てて男の精液を欲しがる。胎内に堪えようのない疼きが渦巻き、じくじくと愛蜜を女戦士の膣内に分泌させる。熱く疼く秘肉を男のペニスが通過すると、背中が反り返りそうになるほどの快感が身体中を走りぬけ、一層熱っぽくフェラチオに没頭

してしまうのだ。
「んちゅぷぁっ……はむむ、あぁぁ精液欲しいよぉぉ。れろれろッ。ふぅぅんっねっとりとして濃くて美味しいオチ○ポ汁、一杯飲みたいッッ！　ちゅぷ…」
「もうたまらねぇって顔だな。エロい顔しやがって……」
「フフフ…すっかりペニスの味を覚えちゃったみたいね……」
男たちの言う通り、凛の表情は熱に浮かされ、だらしなく口を開けたらぁっと涎を垂らし、幸せそう顔を紅潮させ、子宮からのたまらない快感、肉棒を口一杯に含む充実感を味わっていた。
「あーーーーんむむぅぅ。そんなズンズン突かないでぇぇ…壊れちゃうぅぅ。私のオマ○コとお尻が壊れちゃうぅぅぅぅぅぅむふぅぅぅぅ!!!」
スーツに収まりきらないムッチリとした巨尻を揺らしながら、自分から腰を打ちつけ、ペニスが膣粘膜を抉り取っていくのを感じ取る。尻粘膜を擦る肉棒もその存在感をどんどん増して、行き止まりのない淫穴を徹底的に調教する。肛門快感にたまらず、両手をせわしなく動かし射精を促す。性臭と女戦士の汗にまみれ、部屋中が官能の霧に包まれていく。
「ほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!　オマ○コ裏返るぅぅぅぅぅぅ!!　お尻がひっくり返っちゃうぅぅぅ!!　オチ○ポの形になっちゃうぅぉぉぉぉぉぉッッ!!!!」
女のあられもない痴態に、男たちの興奮も限界に達する。
「おおぉぉぅッッ!!」

どびゅびゅッッ!!

「ふむぅぉぉぉぉぅぅッッッッ!!!」

まず最初に口の中のペニスが爆発した。柔らかい口腔粘膜に向かって熱い白濁液が注がれる。舌に感じる汚らわしい味が、凛の官能を一層高めていく。

(熱ひぃぃぃッ!! 精液がッッ口の中ぁッッ!!!!)

どくん…ッどくん…ッどくん…ッ。

ペニスの脈動と同時に、凛の心臓も高鳴る。頭を抱えられ、竿内の精液を残らず口に受け止めさせられてしまう。

どびゅるるッ! ビュブブブブッッ!! ぶりゅりゅりゅるッッ!!

(こんなに脈打って……まだ出るの……?)

小さめな口一杯にとても一度では飲みきれないほどの精液を溜め込まれ、ザーメン味の固い亀頭で蓋をされ、窒息状態から抜けるには精液を呑み込むしか方法がない。

ゴクリ……ッ。

喉が鳴った瞬間、お腹の裏側がカァッと焼けるような熱疼が発生する。一度飲精を始めた女戦士の喉が次々と精液を胃へと流していく。

「あぁ――精液――ザーメンッ――美味しいぃぃぃッッ♥♥♥」

ドロっとした発酵したヨーグルトのような食感と、形容しがたい性味が凛の女としての中心、子宮を充足させる。おぞましいはずの男の液体が美味しくてしょうがないのだ。喉

をネバネバした液体が通過する度に頭が痺れるほどの快楽が首筋から背中を伝って、
「ん……ッ…んむぅ……ッ……んむむぅぅぅぅぅぅッッッ」
自分の身体の中に精液を呑み込んでいるという事実が、彼女をめくるめく愉悦の時へと導いていく。身体を震わせ、背筋がグゥンッと反り返る。切なげに眉をひそめる美貌が真っ赤に染まり、口腔を埋め尽くす精液の味が脳を直撃する。
「はぁぁぁぁぁっぁっぁっぁぁぁぁ」
深く挿入された膣内のペニスをギュゥゥッと締め付ける。尻粘膜のペニスの圧迫感がたまらなかった。びゅっびゅっと小水のように愛液を男の腰に噴きかけ、おとがいを反らす。そして口にたっぷりとスペルマを含んだままアクメに達する。
（……こんな……ザーメン……アクメ……ッッ……クセになっちゃう……）
「ふん……ふん！」
女の絶頂を味わう凛をさらに追い詰めるように、騎乗位で腰を突き上げていた男のペニスからも頂点の前兆が見えた。パンパンと音を立てて何度も尻に下半身をぶつけ、アクメ中で動けない女戦士を支配する。
「だめぇッ!!　まだッ！　イってるッ最中なのにいいいッッ!!　今……射精されたらッ！　オマ〇コ狂っちゃうぅぅッ!!!　チ〇ポの事しか考えられなくなるぅぅぅッ！」
露骨な女性器を表す言葉を吐きながら、表面上嫌がっているようなポーズを取る。だが、女戦士の丸い巨尻は二本の肉棒を一層たっぷりと味わおうとグイグイと文字を描くように

回転していた。膣内射精だけでも、身体の芯まで溶かされそうなほどのアクメを味わったのだ、それを越える甘美な衝撃を想像すると、心臓がドキドキと恋をしているかのように高鳴る。どんな事をしても、自分の何を捨てても、あの一瞬の幸せを味わいたい。

「欲しいッ――ザーメン子宮にゴクゴク飲ませてぇぇッ！　美味しい白濁精子ッお腹に一杯ごちそうしてぇぇぇぇぇぇ……ッッッ!!!!」

絶頂寸前の快楽に懊悩する女にトドメを刺すように、肛門粘膜を責めていたペニスが、これまでで一番深く、腰と菊門がくっつくほどに深く深く、亀頭を埋め込む。ゴリっという音が子宮の裏側に聞こえた。そして同時に射精が始まる。

どぶりゅりゅっるるるるるるるッ!!　どぶぶぶびゅるるるるるるるっっ!!

「あぁぁぁぁぁぁ――――――――ッッ――――――――子宮が……熱いいいいいいいいいいいいいい……クぅぅぅぅ――――――――ッッ!!!!」

身体がイッている途中なのに、子宮に精液を浴びせかけられ、さらに一段上の絶頂へと昇らされる。汗まみれの身体をくねらせ、舌を突き出し、あからさまな絶頂の叫び声を上げる。背筋にまとわりつく甘ったるい感覚が消えない。いつまでも甘い絶頂感がへその裏側に渦巻き、何度も何度も背中をうずくまらせたり反り返らせたりを繰り返す。

「ん――――オマ〇コとお尻の穴が焼けちゃぅぅ、焼けるぅぅぅぅぅぅぅッ!!!!　子宮がビクンビクンって躍ってるぅぅおおぅおおおッ!!!!」

どびゅぶぶぶ!!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/